

こととウイルス消失はRVRを認めていたことから、20週目にPEG-IFN + RBV中止に踏み切った。その後、外来経過観察しているが肝機能障害は改善し、ウイルスの再燃は20週確認されていない。

【考察】自己免疫性肝炎2型の疾患頻度自体が多くないことと、PEG-IFN + RBV療法を20週間目で中止したが、その後20週後現在でもウイルス再燃ないことより報告する。これまでにCHCの治療にインターフェロン(IFN)を選択し、IFN治療後に肝機能障害の増悪をきたした症例や、免疫異常が惹起されて自己免疫疾患が誘発された症例が報告されており、HCV感染のあるAIH症例の診断や治療法選択には注意が必要である。

23 部分的脾動脈塞栓術施行後インターフェロン導入したC型慢性肝疾患の治療成績

廣瀬 奏恵・石川 達・窪田 智之
阿部 寛幸・長島 藍子・富樫 忠之
関 慶一・本間 照・吉田 俊明

済生会新潟第二病院消化器内科

【目的】肝細胞癌死亡者数は増加傾向にあり、約80%がC型肝炎を背景疾患として持ち、肝線維化が進行すると高率で肝細胞癌が発症する。肝細胞癌の予防にはウイルス排除が最も効果的であり、インターフェロン(IFN)治療が広く行われている。しかし、線維化が進行すると血小板減少を来すため、十分量のIFN治療が困難となり、そのために治療成績は不十分なものとなっている。そこで、近年脾摘ならびに部分的脾動脈塞栓術(PSE)が行われた後にIFN治療が行われている。当科におけるPSE後のIFN治療成績並びに今後の展望について考察した。

【方法】対象は2009年1月から2011年12月に肝細胞癌発症のないC型慢性肝疾患に対してPSE施行後にIFN治療を導入した全11例で年齢は45-75歳(中央値62歳)、男性6例、女性5例、全例がセログループ1型で、高ウイルス量で

あった。PSEは高塚法に準じて行った。PSEの回数は全例で1回、梗塞率の中央値は59.3%、PSE前後で血小板値は平均値で7.1万から15.8万まで上昇した。IFN治療はPEG-IFN α 2b/RBVが4例、IFN β 先行PEG-IFN α 2b/RBVが5例、PEG-IFN α 2b/RBV/TVRが2例であった。PSE前後、IFN治療中、治療後の血小板値、AFP値、ALT値、血清Alb値並びにSVRに関して検討した。

【成績】SVR判定可能4例中2例にSVRが得られた。PSE前後で血小板値は全例とも上昇し、IFN治療によって一時的に低下するがIFN治療終了後には再上昇が見られた。血清Alb値も同様にIFN治療前は3.2g/dl、治療終了後は3.8g/dlと上昇傾向が見られた。AFP値もPSE後IFN導入によって低下傾向が認められた。ALT値についても低下傾向が認められた。

【結論】血小板低値C型慢性肝疾患症例に対してPSEを施行する事でIFN治療が導入でき、ウイルス排除だけでなく血清Alb値を含めた肝予備能の改善や肝炎鎮静化、さらにはAFP値の低下を認める事から発癌抑制へも貢献しうると考える。

24 PEG-IFN α 2b + RBV72週治療後に早期再燃したが、PEGASYS少量長期投与にてSVRに至ったC型慢性肝炎の1例

和栗 暢生・薛 徹・林 雅博
佐藤 宗広・相場 恒男・米山 靖
古川 浩一・杉村 一仁・五十嵐健太郎

新潟市民病院消化器内科

【緒言】プロテアーゼ阻害薬の登場により難治性とされるgenotype 1b、高ウイルス量症例のSVRも高い確率で狙える時代になってきた。しかし、その強い副作用などから恩恵を受けられない症例も少なくない。PEG-IFN α 2a少量長期投与を行いSVRとなった症例を報告する。

症例は50歳代の女性。初回治療の天然型IFN α 24週治療では再燃。2次治療としてのIFN α

2b/RBV 24 週治療では NR. 3 次治療としての PEG-IFN α 2b/RBV 72 週治療では終了後 1 か月で、早期再燃した。その後 HCV-RNA 量の増加に遅れて ALT の上昇がみられた。ALT 正常化、肝発癌抑制目的に、4 次治療として PEG-IFN α 2a 90 μ g の週 1 回長期投与の方針とした。28 週で HCV-RNA 陰性化したため、さらに 100 週治療を継続した。その後 SVR を確認し、現在経過観察中である。

【考察】PEG-IFN 治療の登場前から 2 年以上の長期 IFN 治療の高い SVR 率が報告されている。我々もそれに倣い、以前も 2 年半にわたる天然型 IFN α 少量長期投与で SVR に至った C 型肝炎硬変症例を経験し報告してきた。IL28B SNP や HCV コアアミノ酸変異、ISDR など、IFN 治療の効果に関わる各種因子は本例も測定されていないが、おそらく有利な条件が揃っていたと思われる。IFN 少量長期療法でも HCV-RNA 陰性化が得られれば、その後長期の治療継続に期待してもよいと思われた。

25 肝細胞癌治療後に部分的脾動脈塞栓術施行し IFN を導入した C 型肝炎の治療成績

阿部 寛幸・石川 達・窪田 智之
堀米 亮子・長島 藍子・廣瀬 奏恵
富樫 忠之・関 慶一・本間 照
古田 俊明

済生会新潟第二病院消化器内科

【目的】C 型肝炎肝疾患では、肝炎の進行及び肝発癌抑制を目的として IFN 治療が行われる。また、C 型肝炎肝細胞癌根治後も、年率 20-30% で再発すると言われている。そのため、肝細胞癌治療後の患者に対して再発抑制効果、肝機能改善効果を目的として、IFN 治療の有用性が報告されている。しかし、肝細胞癌発症患者では門脈圧亢進症進行により、脾腫ならびに血小板減少が起こり、IFN 導入が困難な症例も多い。今回、我々は当院における肝細胞癌治療後に部分的脾動脈塞栓術施行 (PSE) し IFN 導入した C 型肝炎の治療成績について検討、考察した。

【対象と方法】C 型肝炎治療後に PSE 施行し IFN 導入した 8 例。男性 4 例、女性 4 例で肝細胞癌罹患時年齢は 49-79 歳 (平均 59.75 歳)、cStage は Stage I が 3 例、II が 4 例、III が 1 例、Serotype は Group1 : 7 例、不明 1 例。HCV-RNA 定量では高ウイルス群 5 例、低ウイルス群 3 例であった。PSE 後の IFN 治療は全例 IFN β 先行 PEG-IFN α 2b/RBV 療法である。

【成績】脾梗塞率は平均 47% で、血小板数 7.4 万/ μ l から 12.4 万/ μ l に上昇した。PSE 後 IFN 治療にて SVR が 8 例中 5 例に得られた。IFN 治療により、ALT、AFP は低下傾向を示し、一時血清アルブミン値は低下するものの、治療前平均 3.1g/dl から治療後平均 3.4g/dl に上昇した。8 例中 3 例は無再発で無再発生存期間は 21.4 ヶ月であった。

【結論】肝癌治療後 PSE 施行し IFN 治療介入により 62.5% の SVR が得られた。また、腫瘍マーカーの低下及び肝炎が沈静化し肝予備能の改善も得られた。再発例は認められるものの肝癌治療後 PSE 施行し IFN 治療を行うことは生存期間の向上に貢献し得ると考えられる。

26 当院における C 型肝炎に対する Telaprevir 導入の現状と薬剤管理指導

鈴木 光幸・佐久間 愛・石川 達*
窪田 智之*・堀米 亮子*・阿部 寛幸*
長島 藍子*・廣瀬 奏恵*・富樫 忠之*
関 慶一*・本間 照*・吉田 俊明*

済生会新潟第二病院薬剤部
同 消化器内科*

【目的】当院においても PEG IFN α 2b + リバビリン (RBV) + テラプレビル (TPV) 3 剤併用療法を導入した患者に対する薬剤管理指導業務の現状と投与後の経過について検討した。

【方法】対象は 2011 年 12 月から 2012 年 2 月の 3 か月間で 3 剤併用療法を導入した 14 例 (平均年齢 63.1 歳 \pm 18.72 男性 8 例女性 6 例 HCVR-NA \approx 6.48 \pm 0.62LogIU/ml) において男女 2 群に分け、薬剤の平均投与量を算出し Hb 値の推移